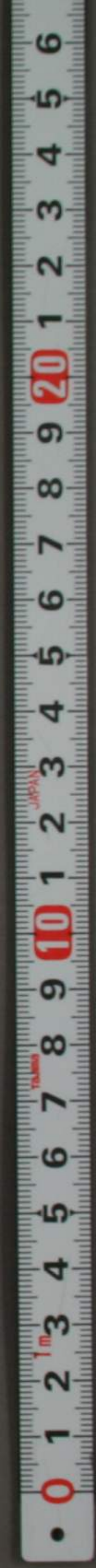


施本  
救民藥方錄  
全

1冊  
600  
192



門イ管  
種 600  
巻 192

叙

予謹不賜民藥方之刺是則

政府濟世の賜方也。人の世も居る蓋病傷少くは然も躬  
自其良方知人鮮く。街巷の人と雖も。前を跋後へ震く。  
而を況や邊鄙は人を。是をそめて急備の切なり。苗の香りさる  
がぬく。或も秀秀て愛さるるは。いと。愛ふ

龍澤文庫

政府の仁政日新中。膏澤赤子。給る車度太か。至  
抑世良方。大都田野の膏品。至賤兒女も製し易く。生術も  
亦尋常。半中。其切なる。倍。誠。非。常。靈方。なり。嗚呼  
宜我是方。名家の奥。我良醫。秘旨也。予郷黨。此患。運付ハ  
時。是方。施。忽然。して。全活。最。希。世の神方。今。幸。ハ

堯天を戴き國恩を被服とて以て人も。まゝより固陋の見如何ぞ  
 萬分を奉答せん哉。謹て是方以三復を祈ふ。世に所謂良藥秘術  
 と號稱してその方敢て化を不免も豈此の如きや。夫四海は天  
 九洲の廣必何ぞく不知して普く急を傳へんや。仍く是を待て付  
 家々を傳へ戸々を曉えんとん。敢て國恩を奉答とて云ん。庶幾ハ  
 與衆共ふ是より由も亦非畔を去る。且予歷代所傳の短方も亦  
 卷末に記して世に示さんとん。予と以て方以廢とて云ふと云爾。

文化辛未年正月

奥州須加川  
 阿部正右衛門正興



○大人小兒急病或は急難を救ひ治する秘方は左小記の者也

- 一 病大由食れ方は。○ 速杏仁を赤くする。秘妙して社務は。此は大小  
 には。腫ひ。痰や。小も。其。石や。ど。も。も。して。味。唇。を。灸。く。と。く。多。を。れ。杏。仁。の  
 中へ血を吸込なり。此のどく。後。皮。も。取。入。血。止。を。疝。に。く。す。み。の。附。止。は。し  
 若。底。沙。く。血。出。と。も。毒。を。杏。仁。の中へ吸とみ。後。の。患。は。疝。口。へ。是。を。ど  
 ぐ。と。く。○ 昔。の。大。さ。他。一。血。を。厚。く。中。を。か。き。き。して。艾。を。山。に。灸。し。  
 痲。ら。ち。ふ。湯。水。の。修。く。る。を。忘。む。なり。又。杏。仁。の。こ。ら。か。う。の。湯。水。に。浸。し。  
 皮。を。去。り。う。ち。れ。肉。を。刻。て。妙。也。一 疝。は。小。風。の。ある。を。大。の。患。也。  
 蕪。を。搗。ち。ち。り。汁。を。一。を。い。つ。七。日。ゆ。く。に。飲。せ。七。四。十九。日。ま。る。ふ。七。搗。ち  
 毒。と。ま。り。毒。ら。ち。入。事。也。一 又。升。麻。葛。根。湯。を。吞。入。る。は。し。  
 女。小。交。是。一。と。極。也。忌。
- 一 胡麻 一 麻仁 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子
- 一 苧子 一 のびる 一 つひに 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子 一 苧子
- 一 苧子 一 川美 ○ 此外 苧子 苧子 苧子 苧子 苧子 苧子 苧子 苧子 苧子 苧子

右を百日の間を食くべし。酒をこれに至るまで大毒し一年忌下  
大肉これ一代を食くべし。

指のいづみ。ひきうそつまらみ。其外何れも言をとりつせしは  
但し夏の中よりしてしきりし毒粉にして分は

秘つらふ蛇のしけはを焼けて胡麻の油をとり分は

崩は交してふ。猫のよれ又糞をぬり分は

又うほまり虫の糞に飯をぶちまけて秘り分は  
又麴のけるる肉をすり分は 一又梅のたもとをとり分は

秘つらふ小使目入るふ猫のよれをばし入は

猫は交してふ。痔瘻の汁をばし 一犬の毛を焼けるもは

一又大の糞をぬるもは

一 浅咽ふはまのりらふおのりか香ては

一 又のぶとをを呑もは 是ハ胸つらぬるおはきり入るなり

一 乳のいれらるる岩百合の根をすり粉にしてとまき分は

一 突目ふの蠅ののこまを飯粒を砕いて交を乳汁をとりと秘り合せ  
目ふしては 一又わけびの蔓の粉をすりせん下は

一 多の眼あをるびらちの焼灰を乳めて解はしては

一 目のよつた人毎朝臨みては中を磨きその合陰を手のひらへ吐出  
目へ付べし。秘のてくされハ一生目のかきこは

一 渚の奥のあつりたる草の根を丁粉にして香ばし  
一 又さらばしの実をせん下のりし 一 又煎豆を香ばし  
一 又牛糞のあつりたる草の根をせん下のりし

一 酒のあつりたる草の根の根を茄子の根と白の根と併せても丁粉にしてのりし 一 又葛の根もよし

一 草の類のあつりたる草の根の根をせん下のりし  
一 松茸のあつりたる草の根をせん下のりし

一 蕎麦のあつりたる草の根をせん下のりし 一 又かりん皮を煎用もよし

一 食滯のあつりたる草の根の根をせん下のりし 一 又かりん皮を煎用もよし  
一 又かりん皮を煎用もよし

一 餅の咽のあつりたる草の根をせん下のりし 一 又大根の根を煎用もよし

一 湯火傷のあつりたる草の根の根をせん下のりし 一 馬のあつりたる草の根をせん下のりし  
一 又かりん皮を煎用もよし

一 灸刺のあつりたる草の根の根をせん下のりし 一 又蠟を煎用もよし

一 湯火傷のあつりたる草の根の根をせん下のりし 一 又鯨魚の根をせん下のりし  
一 又大麦を粉にして水でゆりてよし

一 咽のあつりたる草の根の根をせん下のりし 一 又菊の根を煎用もよし  
一 又鳥の糞を水でゆりてよし 一 又松の灰をのみてよし

一 蜂のきしうろふ蓼れあがり汁を付ては 一 又塩をぬるもは  
又いものくまきのやあをえ付ては

一 いらくの虫耳お入らるる胡麻の油をまきば 一 又蓼れ絞汁を入るもは

一 百足のきしうろあふそのひうをまふとるはけしてぬる  
又いものくまきのやあをえ付ては

一 蛇お咬れらるる山中をさるるふらふらお地を掘かきぬる手足を其中へ  
入れ上より土をかけ堅く押付その上よりあつた小便をそとれ疵はより毒氣を  
りばて土を去り疵は小便をそとれ後毒を厚くぬり布うちあせめてさ  
宿へぬり冷酒をあて毒を洗ひ去り雄黄乾姜を等分は馬齒莧の汁を  
調へ疵をぬりあげ廻りぬる上を布うちあせめてさるる毒を洗ひ去り  
紫莧の汁をとり一二盃を飲べし升麻葛根湯と天竺黄を  
又貝母を粉にし酒をあふませ呑めば毒がぬるして酒疵より水とる

一 又蛇お咬れらるる山中をさるるふらふらお地を掘かきぬる手足を其中へ  
入れ上より土をかけ堅く押付その上よりあつた小便をそとれ疵はより毒氣を  
りばて土を去り疵は小便をそとれ後毒を厚くぬり布うちあせめてさ  
宿へぬり冷酒をあて毒を洗ひ去り雄黄乾姜を等分は馬齒莧の汁を  
調へ疵をぬりあげ廻りぬる上を布うちあせめてさるる毒を洗ひ去り  
紫莧の汁をとり一二盃を飲べし升麻葛根湯と天竺黄を  
又貝母を粉にし酒をあふませ呑めば毒がぬるして酒疵より水とる

一 出れぬる止めて後貝母の粉を付ては 一 又たごの氣を付ては  
又蛇の首小臼砕く五六分切り粉をたらしははは付ては

一 又まきせるのやあ付ては 一 又夏豆の氣を付ては  
又胡椒の粉を破りて解きけしては

一 右を合せて利の蛇を咬れらるる人川を渡るべしあせて手足洗ふべし

一 水お漏れらるる者早くは紙用き巻をとりさせ水を物とて其衣裳を  
脱せ膝の中へ巻を巻くまきあて竹の管をとりてあ方れ耳を吹きし  
越より桶を横はしてそれへ腹をあてさせ流しき昇るけああ出て流る  
或は又たびの上へ蒲葦なりとも高く巻れまへ腹を寄らむわけて  
横おみせせ戸びを昇てゆき息を止せ姜の汁を口の中へ入し  
又水をおきとてあき氣あたるる人をあをのけあけし上へ漏れし人をう伏  
小きあせてまきあの人を押しさるるうごうを水出る  
又皂莢を粉にして粉お包み肛門の中に入る女を前陰と肛門とお入る  
あがらして水出蘘生る

右顧進人氣の付て後をわく酒を温め昏夏八飯の湯を吞とせし

一 大木或ハ至上より落又と落馬中氣絶ちたる者ハ至下より落たる者の

口を開き小便を吞け飲とせ熱して三杯より落或ハ強く吞らる

一 又錫以馬燒はて里芋を搗おし煉束て煙我世更之付込即切ぬ神

一 踏下きハ河骨の根を馬燒は蕃振の馬燒と南が合せ甘草乃

一 疫疾の熱各散しあつに芭蕉の根をすりおし絞りてけきぢりけを

一 又茗荷の根をすり絞り汁を用ては一 又牛房を搗汁を用ては

一 丹毒療治それ丹毒の病疔その相類あつるし宜初小左右の耳

および頰の皮赤く又赤黒く成りわたり夫より咽喉しけ其相類を

なり或は腹痛するもの或は血氣を失ひしる事うに成る復痛する

腹かたたへ石の如く又復あつる事して復は熱あるもの或は病の輕

重によるしけ痛ハ俄ハ發症一甚あるもの尤病小其時して耳および

頰の皮をすり丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒

丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒

丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒

丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒

丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒

丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒

丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒

丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒丹毒

一五疳の根を煮て実ともにて是焼はして味候入且手を饅のこも毎に  
 ありけりちゆに

一吉胎の昆布を是焼はし紅粉をてとれ付ぬりては

一寸白ふと五八指のちも女を酒もく吞痛も付へ奇母あり

一疳瘡の小豆を豆をへと甘州か加水もて煮て毎日此汁を吞

豆をらふ付の妙は疳瘡かほほうそう流りて吞香蜜へ至く汁

ほう瘡の出るもさうか落のちの粉とせんと吞と一夜のちら山

あげるの妙なり一疳瘡のちの後目かさうりの付川をびを洗

はゆをり粉子のちをりけと等分して目もしては

○疳瘡の呪薬

- 一辰砂 一麝香 一トウゴマ 三十六粒
- 一五釐 一トウゴマ 三十六粒

トウゴマを竹昆ろておして之味の葉取ひとろよ交せ洗淨する器にお入れ  
 重りふ記を透圖の通り小児の十之を所を以て端午の午は刻



此のどしを  
 葉落を骨

一頭上の中

一後チリケ

一左右手の折目

一胸のまの中

一左右服の下

一左右足折目

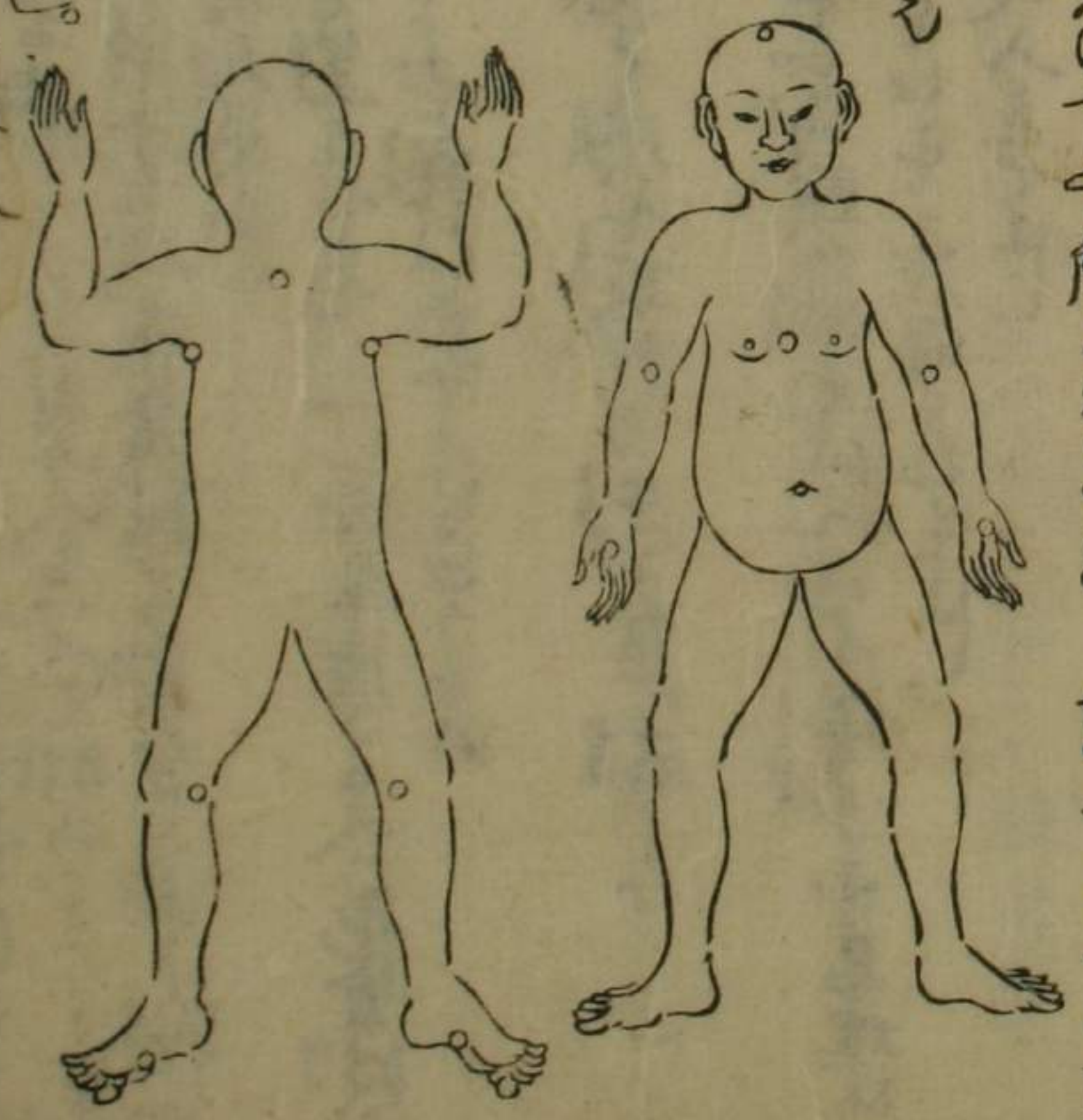
一左右掌の中

一左右足の平

一右を通り透るよ合せ

一小児を人よ此法を用り付の葉落者

はけい人もまきんこけ人をりちいへるべ





- 一 くらり付残りとも外人へ用ひど清浄なる更替
- 一 多々一ツ家の内二三人付法を用ひる所ハ小児まゝ人ハ其毒故へはける人もまゝ人ハ何人もまゝ人の小児ハ藥うらふ付人も一人ハ其のどくニ年児ハ何れハ疱瘡せむ此法を用ひて十五代疱瘡波なる家方ニ由り傳へ公まゝ年付法を用ひる所ハ疱瘡死災ハ
- 一 武々年用する人の惣身ハ少くも年用する人ハ一ニ々年用する人の疱瘡波なる右ニ通奇妙の法ハかゝるごとく經ひあやむるごとく
- 一 夜啼するハ小兒ハ草艾を燒く灰を取乳の先ハ付て吞べ
- 一 虫歯少ハ昆布とあん奴の塩と鳥賊の甲とけ三石を等分ハ其毒燒けてはけは
- 一 又芥の煮たり汁を少く耳へ入るとは
- 一 聘耳ハ大根の煮たり汁をとよりれ先ハ付て入れるとは

- 一 又燂のぬけかきを粉めて胡椒の油めてとれを入れては
- 一 赤つひせんハ湯氣と豆の粉を湯氣は胡椒の油とを解有は
- 一 便毒をれぬぬハむき胡椒を湯氣にして酒めて吞べは妙なり
- 一 痲病ハを蚯蚓の中ハ土をこね半ハはざり解らば白砂糖を入れ吞下ハ大妙なるなり
- 一 鼻血ハ山椒子の実を湯氣めて鼻の中へ吹入は
- 一 又胡椒の粉ハ紙ハ包めて鼻の穴へはけるとは
- 一 又薬のともハ煎下ハ合とて止るとは
- 一 腫造ハ燕の巢ハ中の料を燒て粉めて吞べ
- 一 又小豆の煮たり汁を少く吞べ

○ 小便不通ありしこ虫をさく飯お灸服へ送る一 子違ふるものこ

○ 白禿丸。ほろろのあはれを胡麻の油で付てもよし

○ 又芝の厚焼を胡麻の油で付てもよし

○ 狐臭の患をとりて服の巾へ懸てるは。穴のあかろぬなり。其下へ  
灸をすべし 一 田螺の壳を粉ちて付るもよし

○ 喉痺の酒を塩を入らむ妙し 一 又赤藜を粉ちては。粉ちて吹入ては

○ 又密掛の厚焼を粉ちて吹入ては 一 又梅干此の厚焼を吹入ては

○ 幼むろぎれ丸の苦練を酒に溶かして付てもよし

○ 志のかけ丸の牡蛎を粉ちて髪油で解てはけは

一 又里のものと土をあらかると焼て粉ち。かみのめづらに付ては

一 又菘子の木をせん付てもよし

一 欬逆丸を梅のろろでせん付てもよし

一 又とうがじの粉をうどんの粉ではきみ丸を吞ては

一 中暑霍乱の療治。小児の腹お至りて俄お目やえぬ。氣を殺し。又を

後痛しめ。又苦しみ。又ハチハチは。常きけひ。復石のこく。おころり腫の類ひ

あり。これ大方中暑霍乱。そまや。醫師よ。針よ。といふ。つと。息を

ひきとり。死をる。小児は。星を治するの妙。常に。小児の。せ。を。た。く。り。え

を。入。て。右。の。病。を。ん。ら。り。と。ふ。小。麦。の。葉。を。一。寸。ち。つ。ふ。刺。し。て。お。し。め。る。ま。い。り。あ

を。入。て。今。も。あ。せ。せ。ん。其。前。の。湯。を。拭。中。の。り。の。ひ。じ。病。人。の。腹。脇。の

あ。ら。を。温。め。け。る。じ。せ。ん。揺。く。ま。え。う。て。の。あ。ら。あ。仕。替。く。ま。て。温。め。れ

付。た。と。久。氣。絶。あ。ら。病。人。あ。も。息。を。久。助。る。と。奇。妙。なり。此。病。難。と

道。々。と。神。の。じ。け。病。丹。毒。よ。万。遠。と。あり。丹。毒。の。あ。お。は。泥。



此のくさくさして息あがり。粥の湯を呑とを。

▲ 藥鶏のとさらの血を多りては中に入る。

但男も雌の血をりちひ。女も雄の血をりちる。  
此をこればよみぐるなり。

一 出火の節煙ふりせ倒とてはあ。大根の志どりけを呑とを。

一 物心して途中あゝ氣付お合せざる所。まじりたる者ゆゑ口を割て息を  
吹入ると也。

是方已行于封内七年於茲此

政府所以加惻隱於庶民矣。經驗最有餘徵也。

倚嗟是方者。疾病患難之急務。未能或之先也。

宜且以國字行之者。欲及寒郷開口望哺者也。

於是乃吾儕拜之曰。賜民藥方。謹而口授筆受。

焉。仍舊貫其可忽哉。今茲辛未春。遂上梓。予雖

不肖。乎所藏方者。亦欲附驥尾。當仁苟所不辭

也。阿部正興再拜併跋。

奥州須加川

阿部氏藏板

不施 賣買 許本

江戸馬喰町二丁目角

西村屋與八

製本所書肆

所將人  
...

...

521

...